

床

下

佐藤 寛子

メアリー・ノートンの「床下の小人たち」は、おとなになつてからも、思い出すと読みたくなる私の大好きな話だ。安全ピンを洗濯干しに利用したり、ミシンの糸巻きを椅子にしたり、針は身を守る剣になつたりと、床下に住む小人たちは、床上に住む人間がいらなくなつて捨てたものや、何の気なしにポイと置いたもの

を、夜中にこつそり持ち出して、自分たちの生活に役立てて暮らしている。ある日、床上に住む男の子に目撃されたことから、少しずつ床下の世界の存在が、人間に知られるようになり、小人たちは住みにくくなり、追われるようにして外の世界に旅するようになる。

私にとって、何より魅力的なのは、この話の

冒頭である。ケイトという小さな女の子に、その家の二階に住むおばあさんが語つて聞かせる

話は、今もなお古い家の床下にそうした「借り暮らし」と呼ばれる小人たちがひつそり暮らしていることをうかがわせるものなのだ。

さて、私が今勤めている幼稚園は、今年の十

一月で百二十七歳になる。今の園舎で保育を行うようになつて、七十年以上。古くなつてこ

ろどころ修理はしているが、ほとんどが建てられた当時のままである。時々ガス管の工事で業者の方が入る床下は、おとなでも立つたまま十分歩けるほど高さも広さもある空間なのだそうだ。私は一度も足を踏み入れたことはないのだが、聞くところによると、人間にはあまり好かれない類の昆虫や小動物がたくさん生息しているらしい。私が密かに出会いを夢見ている「借り暮らし」の小人たちの情報は今のところない

のだが、きっと彼らは姿を上手に隠して、そこに暮らしているに違いない。

そんな担任の熱い思いがあるので、必然的に私の受け持つクラスの床下には、「借り暮らし」の小人たちが住んでいるということが普通のことになっている。

床下に耳をますます

幼稚園を巢立ち、今は立派な（？）小学一年生になった子どもたちが、まだ四歳の年中組だった頃のことである。三十五人が一同に集まる降園

前の時間、楽しく遊んだ後

の冷めやらない興奮と熱気と、必要以上に大きいみんなの声で、保育室は騒然としていた。それ以上の声で



静めようとするほどの気力も体力も私にはない。

のこわい本をかき集めては読んでいるY夫が、すぐに私たちの話題に乗ってきた。

「こんなに騒々しいと、下に住んでいる人たちには、きっと迷惑だろうな」

ボソッと言つた私のつぶやきに、即座に反応

したのが、C子だった。

「せんせい、ようちえんのしたにだれかすんでるの？」

いくら信じていることはいえ、未確認の情報をそのまま子どもたちに伝えるわけにはいかない。

「みんなが帰った後にね、遅くまで残つてお仕事をしていると、ときどきだあれもないはずなのに、カタツつて物音がしたりするのよね」「ほんと？ やっぱり、ようちえんにもおばけがいたんだ」

おばけや妖怪の話題には目が無く、幼稚園中

事実なのである。遅くまで仕事をしていたり、お盆や暮れの業者も来ない休みの時に日直にあたり、ひとりで職員室にいたりすると、廊下の奥の方や、どこかの保育室から物音が聞こえてくる。誰かいるのかと思つて覗きに行くが、もちろん誰もいるはずなどない。私は決して肝がすわっている方ではない。むしろ臆病で恐がりなのだが、幼稚園での、この物音については、初めから恐いとか、気持ち悪いといった感覚はわいてこなかつた。

「なんかすんでいるのかなーっ？」

そう言つてK夫が腰掛けていた椅子から離れ、

床に突っ伏して耳をすまし始めた。さつきまで

大騒ぎだった周りの子どもたちは、いつの間に

か静かになつて、彼の様子を見守つている。

「はなしごえがきこえたみたいなきがする」

K夫がささやくように言うと、

「ほんとー？」と言つて何人が立上がり、

そのまま寝そべつて床に耳を当てた。

「いるわけないじやん。だつてようちえんは、

一階だてだぞ」

T夫はみんなを説得しようとするが、

「こびとなんじやないかな。ちいさいんだよ。

きつと」

と言うC子に誘われるよう、彼もまた寝そ

べつて床下の様子に耳をませた。

三十五人の子どもたちと一人のおとなが、保育室に寝そべつて床下に耳を押し当てる様子は、きつと外側から見たら、かなりおかしな

光景であつただろう。

床下の小人たち

このように、床下の小人们は、担任の強い思いにかなり誘導されて、子どもたちと共に存することになった。その後、小人の話がお帰りに毎回出るというわけではなく、私も取り立てて

小人の話題に触れるることはなかつた。けれど、誰かが思い出したように、小人の話を始めたたり、誰もいない保育室で、ひとりこつそり床下に耳を当てている人があつたりと、床上に生活しながら、床下に思いを馳せる感覚が、クラスの中に自然に流れているのを感じることが多くなつた。そして、子どもたちが教えてくれる小



人たちの世界は、私が想像していた以上に豊かで楽しいものであった。

小人の家族編成についてであるが、話をすると子どもによって、さまざまに変わる。一人っ子で三人家族の時もあれば、両親、兄、姉、弟、

妹、祖父、祖母の九人からなる大家族になることもあつた。身長は、おとなのかな人で、私の手の親指くらい、子どもの小人は子どもたちの親指くらいあるようだ。小人の世界でも、兄弟げんかをしたり、お父さんが酔つて帰つてしまったり

するがあるらしく、子どもたちは、自分たちの生活を重ねて話をしてくれることが多かつた。

また、幼稚園の生活の中でも場面場面で小人が登場してくるようになった。靴下が片方なくなつて、私に注意して探すように言われ、一生懸命探すが出てこないで困っている人に、

「きっと、こびとさんが、お布団につかっているんだよ」

と声をかけてる人があつたり（これには、少し困つたこともあつたが…）、おしゃべりが激しいお弁当の時間に、

「こびとさんがびっくりしちゃうよ」

と静かにするよう声をかける人が現れたり、小人の存在で、生活は楽しくなり、私も助けられることが多くなった。

小人たちの引っ越し

四月から年長組になり、保育室も変わることを子どもたちに伝えた三学期のある日、

「こびとたちは、どうなるの？」

という話題が子どもたちから出た。年中組のこの保育室の床下に残るのか、それとも自分たちと一緒に、年長組の保育室に引っ越すのか。こ

の頃には、小人の話をする人はほとんどなく、私もその存在を忘れていたので、子どもたちの中に、小人たちの存在がしつかりあつたことを知り、驚き、ちょっぴり反省した。もととはと言えば、わたしのまいた種である。現実のいそがしさに、床下へ思いを馳せる時間を、私は持たずに過ごしていた。

メリーノートンの床下の小人たちも、子どもとは上手く共存できていた。けれど、子どもの様子から、小人の存在を知ったおとなたちが、小人を驚異に感じ、追い出してしまう。現実の世界に生きながらも、イメージの世界を楽しみ、自由に行き来しながら生活している子どもたちに対し、おとなになると、どうして、自分たちの住む現実にしか目を向けられず、その他のことを受け止めることが難しくなってしまったのだろう。

さて、私たちの小人は、結局、年長になった子どもたちと一緒に、年長組の保育室に引っ越すことになった。そこで一年を過ごし、子どもたちの卒業後は、再び引っ越しをし、今は私と一緒に年少組保育室の床下で暮らしている。そして、年少組の子どもたちも、小人の存在を受け入れ、床上と床下でうまく共存しているようだ。

お帰りに、みんなで歌をうたっているとき、あるいは、お弁当のとき、ついつい大声になつて、気がつくと大騒ぎになつてしまつたりすると、子どもたちの誰かが、口に人差指を持つていって、「しーつ。したに、こびとさんがいるから」と、声をかけたりしている。



小人たちと仲良く暮らしていくために

日々の生活に追われていると、ついつい、いろんなことに気がつかなくなることが多い。現実の世界に生きることに一生懸命になることは大切なことだが、度が過ぎると自分を見失うくらい力みすぎてしまうことがある。自分たちの生活の場以外にも、横を向けば、たくさん的人が生きているのだ。踏みしめている地面の下や、見上げた空には、多くの生き物が暮らしているのだ。

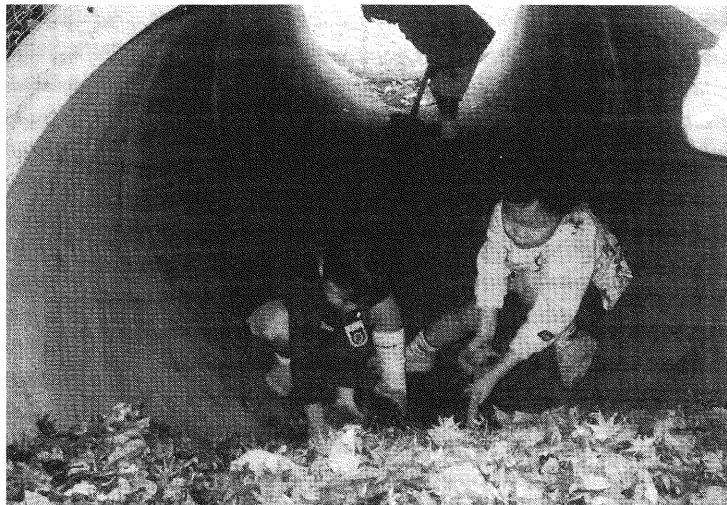
床下にひつそり暮らす小人に思いを馳せることで、今生きている自分たちの生活を少し違った角度からみることが出来るのではないだろうか。

思えば、床上の小さな子どもたちの生活も、床下の小人たちと似ているのかもしれない。生

活の一部始終、おとながいなければ生きていけない彼らの暮らしは、まさに、「借り暮らし」の小人たちである。おとなから与えられた場やものを、子どもたちは、イメージの中であそびに上手に活かす。砂場の砂は、おいしいケーキやプリンになり、一枚のごさは、劇場の客席や空飛ぶ絨毯になつたりするのだ。子どもたちが、ともするとおとなである私たちより柔軟にものごとを捉え、理解していけるのは、現実の世界に生きながらも、もうひとつ別の世界を持つっているからだろう。

床下の小人たちと、床上の小さな子どもたちと、私たちおとなと、それぞれが仲良く共存していくためには、お互いの暮らしに思いを馳せ、イメージできる柔軟性を持ち、それぞれの暮らしを認めていくことが必要なのかもしれない。

◀床上に暮らす子どもたちのファンタジーな空間
——お山のトンネル——



最近、幼稚園の軒下に、不思議な動物が入り込んでいくのを見たという噂が流れた。猫よりもひとまわりからだが大きく、太いしっぽを持つたその動物は、都会では、見かけないある生き物だ。私が信じる小人の正体は、彼（彼女）であつたのだろうか…。いずれにしても、床下の小人たちの暮らしが今までのように壊されることなく、しあわせに続していくことが、私の一番の願いである。なぜなら、小人たちのしあわせは、そのまま、子どもたちと私たちの幸せなのだと思うからである。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）